

大峯 巖 分子科学研究所長への感謝の会 報告

2期6年に渡って分子科学研究所長を務められた大峯巖所長が、2016年3月31日をもって分子科学研究所を退職されるにあたり、最終講義と感謝の会を3月4日午後岡崎コンファレンスセンターで開催いたしました。

最終講義は岡崎コンファレンスセンター大会議室で行いました。「水からの学び、友との出会い」と題した最終講義では、大峯先生がまだ学生だった頃のお話、とくに、ハーバード大学での恩師であるカープラス教授の生い立ちや研究の流れにまで遡った話から始まり、博士研究員として所属された分子研（諸熊研究室）から、慶應義塾大学（助手）、分子研（助教授）、そして名古屋大学（教授）における多くの友人との出会い、研究に関する話が紹介されました。また、ワインを堪能しているフレミング教授の多くの笑顔も印象的でした。もちろん、この最終講義においても、世界的に有名な水の構造変化（水の凝固および融解）の動画とクラシックの協奏も披露されました。

その後、岡崎コンファレンスセンター中会議室に場所を移して感謝の会を行いました。最初のご挨拶は自然科学研究機構長の佐藤勝彦先生を予定しておりましたが、インフルエンザのために急に辞退されることになりました。そのため、挨拶は次期所長に決定していた東京大学教授の川合眞紀先生にお願いしました。川合先生は、大峯先生が在任中に示された分子科学のあるべき姿に触れられ、改めてその重要性を強調されました。なかでも、自然との対話から見出された原理をもとに斬新な分子システムを設計する組織として、協奏分子システム研究センターを設立

された大峯所長のご功績を高く評価されました。川合先生は、次期所長（現所長）として未来の分子科学がどうあるべきかを問いつつ、分子科学研究所の発展に尽くしたいとの抱負も述べられました。

そのあと、元分子研所長の茅幸二先生に乾杯のご発声をお願いしました。茅先生は、慶應義塾大学に理工学部が新設された際、茅・岩田（末廣）研究室を助手の冨宅喜代一先生、大峯先生といっしょにスタートされたこと、故近藤保先生を含めた3人はオーディオ仲間として親しい関係であったこと、分子研所長から理研に移られてからは川合先生と和光研究所の運営に携わったことなどのご説明をされているうちに、すっかり乾杯のことをお忘れになってしまいました。一同、大爆笑の中、仕切り直して、茅先生のご発声に従って、大峯先生とご夫人に感謝の意を込めて乾杯を致しました。

乾杯後の歓談を挟んで、大峯所長にゆかりのある3名の先生方より祝辞を頂戴しました。近藤孝男先生（名古屋大学理学研究科特任教授）は大峯先生との出会いに関するエピソードを紹介され、ご自身の研究との接点に触れられつつ、大峯先生とともに名古屋大学の運営業務に携わられた当時の思い出をお話してくださいました。

高塚和夫先生（東京大学総合文化研究科教授）は、大峯先生の諸熊研究室時代の思い出を中心にお話をされました。当時、大峯先生には思考に際して鉛筆を口元に強く押し当てられる

癖があったそうです。「ようやく難題が解けた!」と部屋に入って来られるときは、きまって口元が鉛筆の芯で黒くなっていたのだそうです。大峯先生のお人柄を表すエピソードに、会場は和やかな雰囲気に包まれました。

神取秀樹先生（名古屋工業大学工学研究科教授）は、ご自身の研究に絡めつつ、大峯所長の学問に対する厳しくも暖かみある姿勢に触れられました。「ところで神取先生、プロトンはどうして一方向に流れることができるのでしょうか。この問題はもうおわかりになりましたか?」——大峯先生の核心を突く鋭い質問に、神取先生は「いつか完璧なデータをもってこの人を説得してみせるぞ」と心に誓われたそうです。このエピソードと似た経験をしたことがあるためでしょうか、会場に集まった研究者の誰しもが、拍手と共に所長への感謝の念を新たにしているようでした。

当日は感謝の会参加者約160名、記念品賛同者約300名のご協力の下に大峯先生に盛大なる感謝の意を表すことができました。世話人一同、感謝申し上げます。

（小杉 信博、秋山 修志、斉藤 真司、
鈴井 光一 記）



分子科学研究所所長招聘会議「化学におけるグローバルゼーション」

2016年5月13日（金）の午後に表記所長招聘会議が開催されました。いつものように分子科学研究所、日本学術会議化学委員会、日本化学会戦略企画委員会が連携して行う会議ですが、これまで日本学術会議化学委員会側でこの会議に関わってこられた川合眞紀先生が分子研所長に就任されたこともあり、抜本的に模様替えしました。分子研内部からの積極的な参加を促したこと、文部科学省関係者を積極的に呼ばなかったこと、野依先生のご出席を大前提にせず新年度の早い時期に設定したこと、交流会を岡崎コンファレ

ンスセンターの中庭でのバーベキューパーティーにして所内全職員にも参加・協力（特に技術職員）を促したこと、などが目立ったところです。来年は今回の経験を活かして若干見直す予定になっています。

会議は化学におけるグローバルゼーションの議論に集中しました。右脳の・バビロニア的発想（応用から基礎を考える）か、左脳の・ギリシャ的発想（基礎から応用）か、論文出版か、データ出版か、査読が先か、発表が先か、論破型か、協調型か、大学では英語の聞き取りが先か、話すことが先か、授業

の英語化を全学的に取り組むのがよいのか、一部の学科から始めるのがよいのか、留学生を学部1年から受け入れるのがよいのか、学士編入レベルから受けるのがよいのかなど、なかなか正解が見えない問題や、日本人学生へのインセンティブのつけ方、海外との産学連携を進める際のいろんな困難や障害、欧米の学生・教員・研究者を呼び込む際の工夫などの問題についても議論が行われました。詳しくは前回同様、日本化学会の「化学と工業」に報告されると思いますので、ご覧下さい。

（小杉 信博 記）

BBQ 懇親会

川合所長の提案により、上記所長招聘会議の後、BBQ形式での懇親会を開催しました。鈴井技術課長と筆者で企画を行うことになり、「多くの来賓をお迎えするのに恥ずかしくないBBQ」と「お客さんが岡崎コンファレンスセンター（OCC）に来て分子研の人に会わないで帰ってしまう、という事態を避ける」というコンセプトを固め、未だかつてやったことのないOCC中庭でのBBQを計画し、分子研の皆さんにアナウンス・積極的な参加を呼びかけました。当初、前例のない火気使用に事務センターも少々及び腰でしたが、OCC防火責任者の生理研井本所長の許可が取れましたので、通常の炭焼きコンロに加えて、ガス式屋外コンロを川合所長のご寄付で購入し、アルコールトーチや音響設備も整えて本格的な屋外パーティーを整えることができました。幸いパーティーは大へん盛況で、チキン丸焼きから焼肉、串焼き、焼きそば、天ぷら、フルーツポンチまで、多くの企画を楽しんでいただけたことと思います。また、所長の発案で小杉教授の化学会賞のお祝いも行いました。多くの方から、大変楽しかったとのコメントを頂きましたが、これは技術職員・事務支援員やUVSORと筆者のグループメンバーの協力の賜物と思っています。この場を借りて、裏方の皆さんには感謝したいと思います。以下、当日の写真をいくつか掲載しておきます。

（山本 浩史 記）



懇親会での乾杯風景



小杉教授日本化学会賞受賞のお祝い



BBQのひとつコマ